

黒人大統領が登場するアメリカ映画

本書の第2部「演習編」では、『国民の創生』(1915)『フィフス・エレメント』(1997)『ヒップホップ・プレジデント』(2003)を、黒人大統領が登場する映画として注目し分析した。(『国民の創生』では、「大統領になろうとする」黒人を分析。)3作品とも、オバマ大統領登場以前に製作された映画である。

『国民の創生』では、大統領になりたがる黒人男性を、まるで「黒人であるがゆえに狡猾で暴力的」であるかのようにステレオタイプ的に描き、「大統領になりたがる黒人など、到底まともとは言えないのだ」「黒人が大統領になるなど、あってはならないことなのだ」と強く訴えかけるものであったが、およそ1世紀を経て『フィフス・エレメント』に登場する惑星連邦の大統領は、「黒人が大統領になっている＝この映画は現実ではなく近未来のはなし」と映画を観ている人にお知らせする「近未来を表す記号」の役割を果たしている。

一方で、本書の「はみ出しコラム：最新映画情報」(79-80 ページ)では、『ホワイトハウス・ダウン』という最新アメリカ映画に登場する黒人大統領を、注目すべき黒人像として紹介した。オバマ大統領が実現した現代では、もはや「近未来の記号、象徴」ではないのであるが、そこに負わされているのは…?

このように、「黒人大統領」、つまり黒人が大統領であることは、アメリカ映画分析ではひとつの、重要な分析ポイントとなりえる。また製作年を確認しながら見ていくと、興味深いものがある。紙面の都合で、本書で紹介しきれなかった**黒人大統領が登場するアメリカ映画**を紹介していこう(【あらすじ】は“allcinema”から引用)。

『ザ・マン／大統領の椅子』〈日本未公開〉(The Man, 1972)

【あらすじ】

近未来のアメリカを舞台に、現大統領が事故死したため、史上初の黒人大統領となる上院議員の姿を描いたシミュレーション・ドラマ。J・E・ジョーンズが堂々とした演技を見せ圧巻。監督は、傑作SF「地球爆破作戦」や良質のTVムービーを多数手掛けるJ・サージェント。元々TV用に作られた作品だが、アメリカでは劇場公開された。

(http://www.allcinema.net/prog/show_c.php?num_c=9061 2015年4月12日確認)

【ひとこと解説】

事故で大統領または大統領候補が亡くなり、本来ならあり得ないはずの黒人大統領が登場する話——本書で紹介した『ヒップホップ・プレジデント』と似た展開だが、製作年は『ヒップホップ...』の30年前、ということではいわば先行作品と言えるかもしれない。

『ディープ・インパクト』 (*Deep Impact*, 1998)

【あらすじ】

ホワイトハウスの女性スキャンダルを追っていたテレビ局のジェニーは、「エリー」という名に行き当たる。だがそれは女性の名ではなく、“Extinction Level Event（種の絶滅を引き起こす事象）”の略称だった。大統領は、1年後に未知の彗星が地球に衝突する可能性があることを公表。これを阻止すべく彗星を核爆発させて軌道修正するプロジェクトが実行されたが、結果は失敗。衝突が刻一刻と迫る中、ついに大統領は地下に選ばれた100万人だけを移住させる計画を発表するのだった……。

(http://www.allcinema.net/prog/show_c.php?num_c=84126 2015年4月12日確認)

【ひとこと解説】

モーガン・フリーマンが演じるトム・ベック大統領は、アメリカ全国民が信頼を寄せる理想の大統領ともいうべき存在で、映画の最後まで生きぬいて人々を導く。彗星の発見者が少年だったという設定や、彗星に深い穴を掘って爆薬をしかけて粉砕するというプロジェクトが描かれるなど、いろいろな意味で「ディープ・インパクト」（深い衝撃）が満載の映画だが、「なかでも大きなインパクトは、大統領が黒人であること」とコメントする映画評もあった。これも前世紀、1998年の作品である。

『26世紀青年』〈日本未公開〉 (*Idiocracy*, 2006)

【あらすじ】

極秘実験で一時的な冬眠状態にされるも手違いで500年後に覚醒した男が、国全体がおバカになっている有様に驚愕しながらその改善へ奔走する姿を描いたSFコメディ。アメリカ国防総省は、極秘で人間による冬眠プログラムを進めていた。そして被験者には、典型的なアメリカ人である兵卒のジョー・バウアーズと、売春婦のリタが選ばれた。1年間という設定で実験は開始された。しかし、責任者が不在となり、ジョーたちは忘れ去られた存在となってしまふ。やがて、2人が目覚めた時には、何と500年が経過していた。しかし、未来の世界は、国民の民度が著しく低下しており、環境破壊も歯止めが効かず、全てが墮落しているという体たらく。そうした中、最も優秀でマトモな人間のジョーが国務長官に任命され、様々な問題を一手に引き受けるハメに。ジョーはタイムマシンを使って過去に戻り、未然に対策を講ずるしかないと判断するのだが…。

(http://www.allcinema.net/prog/show_c.php?num_c=332382 2015年4月12日確認)

【ひとこと解説】

主人公のジョーは、どこから見ても「平均的な男」であった。ところが、同じ男が500年後の未来社会では、知能指数がだれよりも高い天才として尊敬されることになる。そもそも、なぜ未来社会で人類の知能レベルは下がり続けているのか——映画では、「知的レベルが低い人間ほど繁殖力が強く、そういう人間の子孫ばかりが増えていくので」と、説明づけていく。

そんな500年後のアメリカ大統領は、プロレスラーの黒人男性コマチョである。彼は、「知的レベルは低く、繁殖力が非常に高い」を絵にかいたような屈強な大男で、「こんな人間が大統領になるとは！ 未来はとんでもない世の中になるのだ」と映画を観る者を暗然とした気分ひきずり込んでいく。

コマチョ大統領を筆頭に、国民全員が愚かなために滅びかけていたアメリカという国を、ジョーは国務長官として立て直し、ついに新大統領となる。リタは、ファーストレディとなる。二人があたかも新世界のアダムとイブのように描かれ、彼らのおかげで黒人リーダーによってめっちゃくちゃにされかけたアメリカという国が息をふきかえす——この結末に至る設定、どこか既視感が...『国民の創生』によく似ているのではないだろうか。

『2012』(2012, 2009)

【あらすじ】

『ダイ・アフター・トゥモロー』『紀元前1万年』のローランド・エメリッヒ監督が放つパニック・サスペンス巨編。2012年12月21日に地球滅亡が訪れるというマヤ文明の暦にヒントを得た終末説を基に、世界中で怒濤のごとく発生した未曾有の天変地異に人類が為す術なく襲われていくさまを驚異のスペクタクル映像で描く。出演は『ハイ・フィデリティ』のジョン・キューザック、『アイデンティティー』のアマンダ・ピート、『キンキーブーツ』のキウエテル・イジョフォー。

ロサンゼルスでリムジン運転手をしている売れない作家ジャクソンは、別れた妻ケイトのもとに暮らす子供たちと久々に再会し、イエローストーン公園までキャンプにやって来た。彼はそこで怪しげな男チャーリーから奇妙な話を聞かされる。それは、地球の滅亡が目前に迫っており、その事実を隠している各国政府が密かに巨大船を製造、ごく一部の金持ちだけを乗せ脱出しようとしている、というにわかには信じられない内容だった。しかし、その後ロサンゼルスをかつてない巨大地震が襲い、チャーリーの話が嘘ではないと悟るジャクソン。そして、大津波や大噴火など、あらゆる天変地異が世界中で発生、次々と

地球を呑み込んでいくことに。そんな中、ジャクソンはケイトと子供たちを守るため、巨大船のある場所を目指して必死のサバイバルを繰り返すのだが…。

(http://www.allcinema.net/prog/show_c.php?num_c=332430 2015年4月12日確認)

【ひとこと解説】

ダニー・グローバー演じる黒人大統領は、『ディープ・インパクト』の大統領とよく似た雰囲気、まじめで有能な「理想の大統領」である。地球滅亡の危機に際し、世界各国のリーダーが一堂に会して議論するシーンでは、ほとんど白人で占められるなか（日本はアジア人俳優が演じているが）、ただ一人の黒人国家元首として采配をふるう様子が描かれる。避難艇に乗り込むことを拒み、ホワイトハウスに残って避難してきた人々を最後まで救援する彼は、映画の半ばで死亡してしまう。

ちなみに、この映画は、かなり人種バランスを意識して、「死ぬ者と生き残る者」「死ぬ順番」を考えているように思われる。たとえば、大統領は死ぬものの、黒人の主要キャラクター（科学者）は最後まで生き残り、大統領の娘でホワイトハウスに勤務する黒人女性と結ばれる。また、ジャクソン（白人）が生き延びてチャーリー（白人）が亡くなったり、前述の黒人科学者の父（黒人）が、白人男性の親友とともに亡くなるなどである。気になるのは、ロシア人キャラクターは、子どもを除いてすべて途中で亡くなることだが…。

その他

ほかに、大統領とは明言しないものの、近未来の世界でアメリカ合衆国を牛耳っているとんでもない黒人の政治リーダーが登場する映画もあるので紹介したい。映画『エンド・オブ・ザ・アース』(*Rapture-Palooza*, 2013 劇場未公開作品)である。（「ザ・アース」は発音がおかしいが、ケーブルテレビ等で放送されたときのタイトルはこの通り。）

クレイグ・ロビンソン演じるこの政治家の名は、アール・ガンジー (Earl Gundy)。彼は、*The Beast* (野獣) というニックネームを持つが、その名のとおり野卑な男として描かれる。映画の舞台である近未来のアメリカには、善良な人々はすべて天に召されており、「だめなひとたち」だけが存在しているのだが、その「だめなアメリカ」を導く政治的リーダーとして彼は君臨するのである。町中に“Follow the Beast!” (野獣に従え!) というポスターが貼られ、「アメリカもこうなったらおしまい…」という感じで話は推移する——こう書くとどこか既視感が…さきに紹介した『26世紀青年』とよく似ているのである。

既視感は、最後の盛り上がるの場面でも感じられる。「野獣」は、ヒロインの白人女性を妻にしようとストーカー行為をし、やがてあからさまに襲いかかろうとする。いよいよ白人女性の危機…というクライマックスで、彼女は、白人男性主人公によって救い出されるのである。

この映画は、『26世紀青年』に加え、映画『国民の創生』にも似ている。パロディといっ

でもいいほどよく似た展開である。とくに、「野獣」の「私と結婚してクイーンになってくれ」というセリフは、『国民の創生』のサイラス・リンチのセリフと重なるものがある。

以上、紹介した作品を見てひとつ、言えることがあるとすれば、アメリカ映画において黒人大統領をキーワードにした「黒人観」は、時代とともに大きく揺れ、また大きく揺り戻され——をくり返している、ということであろうか。これからもまた、目が離せないキーワードといえよう。

*TVドラマで黒人大統領が登場するものとして、『24（トゥエンティフォー）』が有名。